

八条家の 三人の ご主人様と 私

～朝のご奉仕編～



八条家

八条 九郎
(78)

絢
(21)

八条 武士
(45)

八条 彼方
(20)



私には、三人のご主人様がいます。この八条家の屋敷の前当主である大旦那さま。その長男である八条家現当主の旦那さま。それからそのまた長男の八条彼方——若さまだ。

奥様方はとうに亡くなり、今や大きなお屋敷には三人の主人と、彼らにお仕えする私、絢だけが住んでいる。

男やもめの家の中。主人たちの猛々しい性欲をその身に受け止め、処理するのもまた、旦那様がたにお仕えする私の、大切な仕事だった。

朝はまず大旦那さまの部屋で一仕事だ。老人は朝が早いというけれど、その通りで。

大旦那さまはいつもこの家の誰よりも早くに目が覚める。

夜が明けるのと変わらぬ時間に部屋に着き、襖を開けると今日もまた、大旦那さまは目を覚ましていた。和室の真ん中に敷かれた布団の上で目を開けている大旦那さまに、深々と両手について挨拶をする。

「おはようございます、大旦那さま。本日もつとめさせていただきます」

布団をじわりと捲りあげると、大旦那さまの枯れた老木のような体を包む浴衣の前が、不自然なほど大きくせり上がっていた。

男というのはいくつになっても性欲が減らない、とは聞いていたものの、私もこの家に仕えるまで半信半疑であつた。

私は大旦那さまの着物の前を左右に押し広げ、暗がりには屹立する赤黒い肉棒に触れた。

熱い。そして、樹液をため込んだ古木のように、しつとりと硬い。

いつも、私の女の身体を玩具のように遊び、気持ちよくしているもの。

むわりと鼻腔をつく、老人特有の、けれど濃厚で力強い雄の匂い。私はまず、その威厳に満ちた幹ではなく、その下に重々しくぶら下がっている、二つの熟しきった球へと唇を寄せた。

「ん……っ、じゅ、る……れろ……っ」

シワの刻まれた、けれど確かな弾力を持った袋を、手のひらで下からそっと包み込んで持ち上げる。そして、その裏側の筋から袋の表面のシワの隙間に至るまで、逃さずねつとりと舌の先で糊を剥がすように舐め上げていった。

「……ほう、そこから攻めるか。相変わらず、主人の喜ぶツボをよく分かっているな」

大旦那さまが満足げに目を細め、私の髪を優しく、けれど拒絶を許さない力で撫でる。

私はさらに深く顎を下げ、片方の球を丸ごと、口の中にすっぽりと吸い込んだ。

「んむ……っ、んぐ、ジュブ、じゆるう……っ」

口いっぱいに広がる、独特の重みと苦い風味。上顎と舌でその丸い質量を優しく、けれどきゅっと押し潰すように転がすと、大旦那さまの喉から「うむ……っ」と低く、愉悅に満ちた唸り声が漏れた。

もう片方の球も同じように舌の裏で転がし、たつぷりと私の唾液でビショビショに濡らして、いやらしく光らせていく。そうして下を十分に解してから、ようやく私は、ペニスの先端——すでに濃厚な先走りの汁を溢れさせている亀頭へと、熱い唇を割り開いて吸い付いた。

じゆる、とはしたくない音を立てながら吸い上げばくばくと小さく開閉する先端の孔に舌先をぐっと押しつければ、頭上で大旦那さまの声が漏れた。次いで私は逞しい幹に舌を這わせ、それからゆつくと大旦那さまのそれを腔内へと迎え入れた。

苦くて、少しだけしょっぱい。

口の中に入りきらない根元は両手でじっくりと擦り上げる。私の鼻にかかったような、ねっとりとした甘い喘ぎが静かな和室に木霊するのが、たまらなく恥ずかしい。

必死になって口腔の熱で包み込んでいると、大旦那さまのペニスさらさら一回り大きく膨らみ、私の喉の奥を塞いだまま、どろりと破裂した。

「んっ、くぬう、ふう……」

青臭く濃厚なそれを、喉を波打たせて必死で飲み下すけれど、飲みきれない分が口の端から細い糸を引いて垂れた。それを指先で拭いとり、もったいないとばかりに汚れた指先を舌を出して舐め取っていく。

「んっ、ちゅっ……んっ」

じゆるじゆると音を立てながら指の股まで舐めとり、ふと見下ろすと。

「っ……」

一度達したというのに、大旦那さまのペニスをはなえる兆しすら見えず、天をつくかのようにそそり立っていた。先ほどの口淫でまとわりついた私自身の唾液と自身の蜜で、ぬらぬらと怪しい光を放っている。こくり、と知らずに喉が鳴る。

「絢、おいで」

大旦那さまの許しを得て、私は早くなる鼓動を抑えつつ、大旦那さまの股間に跨った。裾の長いメイド服のスカートの端を、じわじわと持ち上げていく。

ああ、見られている。

「見えないぞ、絢。もっとたくし上げなさい」

「は、い……。申し訳ありません……。っ」

白いエプロンごと紺色のスカートを捲り上げ、口でしっかりと噛み締める。露わになったのは、白いレースの下着に包まれた、私の秘丘だった。いついかなる時もご主人様たちの目を楽しませるために体毛を剃り、子どものようなぬなった割れ目からは愛液がしとどに溢れ、けなげに白い布地をじつとりと濡らしている。ご主人様の前で、こんなにも破廉恥に昂ぶって、蜜を溢れさせている。そのことが、たまらなく恥ずかしい。

満足気に細められた大旦那様の視線を浴びながら、私は下着の股布を指でずらしながらゆっくりと腰を下ろしていく。

ぬちゅ……。じゅぶぶぶ……。と、大旦那さまを受け入れるための場所——私の狭い肉の隘路が、強引に押し広げられていく。大旦那さまのペニスが、肉のヒダをひとつひとつ押し潰すような摩擦熱を伴って、じつくりと私の中に埋まっていった。

シワだらけの、けれど確かな体温を持った手が伸びてきて、私の腰を骨ごと掴む。

八条家の三人のご主人様と私

発行日：2026年5月23日

著者：かのう。

サークル：まるつと

表紙・本文制作：かのう。

© 2026 かのう。
